

# 奈良高専 図書館だより

## 記事

1. 本を読んでおけばよかった  
前図書委員長 小谷 稔
2. 昭和60年度図書委員長就任  
にあたって  
図書委員長 田中富士男
3. 人権コーナーについて  
同和教育推進委員会
4. 卒業生と図書室 三題
5. 昭和60年度図書室利用統計
6. お知らせ 図書室

1985年9月 奈良工業高等専門学校 発行

## 本をよんでおけばよかった

前図書委員長 小 谷 稔

ここに1つの調査がある。大学生たちに、もう1度高校生活を送れるならどんなことをしたいかと質問したものである。(「教育と情報」4月号)

その第1位は意外にも読書である。「小説やいろいろな本を読む」が93.6%である。第2位は「クラブや部活動に精を出す」であって、これは87.8%。第3位は「友人と夜遅くまで語り合う」85.0%。第4位「スポーツに打ち込む」81.6%。第5位「音楽会やコンサートへ行く」81.2%である。その他のものは省くが「アルバイトをする」は44.9%、「のんびりテレビを見る」44.1%で下位の方である。

高校時代のきびしい受験戦争をくぐり抜けて念願の大学生になった彼らが高校時代をふり返って見たときそこには大学合格のよろこびと引き換えに索漠とした3年の月日がよみがえる。勉強に追われて、唯一の息抜きは、ぼんやりとテレビを見ることであった。受験の必要から多くの知識を身につけながら充実感としてそれがよみがえって来ないのである。苦しい勉強の日々は運動の練習にたえる以上に忍耐力と根性をつけたはずであるが、それに対して達成感を必ずしも覚えていないようである。

受験競争に勝たなければならない制度の中にいる以上は、必要な目的に向かって生活を単純化して、目的に合わないものはすべてオミットされるのは当然のことである。本を読みたくてもその欲求は抑える。友人と時を忘れて語りたくても塾に行く時間が来ればその欲求は殺さなくてはならないのである。このような高校時代をふりかえったとき、第1に浮かび上がったのが、「小説やいろいろな本を読んでおけばよかった。もう1度高校生活を送れるなら本を読みたいという欲求なのである。

彼らのこの欲求は、彼らが受験戦争に否応なくまき込まれながらも、青年本来の純粋な精神的人間的向上心を失っていないことを明確に示すものである。本を読むという何物にも束縛されない自由な精神世界へのあこがれを失っていないのである。強制されることの多い中で本を読むことは、自分の能動的主体的な意志でより高い次元の世界に挑戦する数少ない個人的営みである。

ところで高専生活は大学入試勉強の制約がないというすぐれた特色をうたわれてきた。本を読むこと

もクラブ活動に精を出すことも、友人と時を忘れて語り合うことも、高校に比べればはるかに恵まれているはずである。大学生は入試競争によって奪われた読書へのあこがれを強く持っている。私が恐れるのは、大学入試競争の圏外にある高専生は、読書へのあこがれを抑えられていないという幸福が逆に作用して読書へのあこがれを知らず、人類の英知の世界に分け入ることを知らずに過ごすのではないかということである。不可への数を数えつつ、ぬるま湯の中でテストだけをくぐりぬげ、アルバイトに唯一の充実感を覚える、このような高専生は例外的であることを願っている。

## 昭和60年度 図書委員長就任にあたって

図書委員長 田 中 富士男

九月になっても酷暑のつづく6日に行なった「読書と映画の会」に、学生14名、教職員9名が参加し、一応の出来であったと思います。お話を下さった細井先生にお礼を申し上げます。

取り上げた作品が志賀直哉の昭和6年の短編「赤西蠣太」であり、昭和11年の日活映画といえば、学生の中での知名度がゼロであるのも当然といえるでしょう。映画は日本映画史に残る秀作であるとはいえ、原作は志賀直哉の作品の中ではよく知られているとは云えないからです。集まった人数では充分ではありませんが、参加者には好評だったように思います。テレビでみられた「ワンパターンの時代劇」とは一味ちがっていた、などと云った人もあります。今後もこのような企画を考えていくつもりです。

私は図書館委員長になりましたが、この仕事は私にとってずい分久しぶりです。奈良高専に来てからは図書館の仕事は始めてですが、前任のそれも20数年も前の高校では何年間か図書係をしていました。蔵書数も充分でなく完全な閉架式であったのを、新しい校舎になった機会に開架式に変え、生徒の利用が増加したのを記憶しています。

話は横道にそれましたが、図書委員長として、本校図書館がもっと多く学生に利用されるようすすめていきたいと考えています。そのためには学生に読まれる本、学生の希望する図書をそろえて行きたいと思います。学生諸君が自分たちの希望をよせてくれることを期待します。

現代は映像の時代であるといわれています。すべての家庭にカラーテレビの普及した現状がそのような方を許しているのでしょうか。筑波で開かれている'85科学万博でも映像のオンパレードであるとのこと。科学技術の発達がこのような映像のはん乱をもたらしていることは確かです。しかしハードの面での映像の時代もソフトの面では非常にまずいのが現状です。

このような状態は、戦前からの映像を一段低いものとみる社会的評価と関係があるように思うのです。例えば映画監督黒沢明は、フランス政府からは、レジオン・ドヌールを授与されたが、日本では文化勲章の対象とはなっていません。映像一映画はこの国では文化とみなされていないのです。フランスに留学していた京兼先生に聞くと、パリでは小津安二郎の映画がたえず上映されているそうです。しかし日本ではオズと聞いても、どんな人か知っているのは学生だけでなく、先生方も含め多くはないのが現状でしょう。いま私は文化という語を用いましたが、この国では文化というものを、ごく少数の人の趣味的な営み、金持ちの応接室をかざる画を描いた画家ぐらいのものとしてしか考えていないのではないのでしょうか。(暴論は承知の上で云っています。ごめんなさい。)

少し主観にすぎたようですが、今年は図書館運営の上で映像に関わる領域を増やしていきたいと考えています。先ほどの「読書と映画の会」はその第一弾というわけです。多くの学生を対象にした映画の上映会、映像100選の選出、その他、意欲だけは旺盛です。最近公立図書館でも定期的に名作映画の上映を行う所が増えていますが、本校でもそれにならおうというわけです。

その他、図書館事務への電算機の導入、読書100選の改定なども計画中です。2～3年の中には図書館棟の改修なども考えられており、ここしばらく本校図書館にとって大切な時期となりそうです。教職員と学生諸君の御支援が必要です。御協力をお願いします。

# 人権問題資料コーナーについて

## 同和教育推進委員会

すべての国民は、法の下に平等であって、人権、信条、性別、社会的身分又は門地により、政治的、経済的又は社会的関係において、差別されない。……（憲法第14条）

憲法が国民に保障する基本的人権は、侵すことのできない永久の権利として、現在及び将来の国民に与えられる。（憲法第11条）

このように日本国憲法にうたわれている平等の原則と人権尊重の精神は、人類社会の全ての構成員にも向けられ、世界人権宣言や国際人権規約などの中にも表わされている。これらは世界における自由、正義及び平和の基礎をなしているものである。

しかし現実には——私たちの生活の中に苦悩や憎悪の波が絶え間なく押し寄せてきている。そこには、必ず不合理や矛盾がひそんでおり、私たちがそれらの問題の背景や原因を追究せずに放置しておくならば、不合理や矛盾は再生産され、さらに社会の中で拡大されて行くであろう。「本当のこと」を知ろうと努力せずして民主主義の確立はありえない。江戸時代の封建体制からつくり出された部落差別、軍国主義の犠牲となった在日朝鮮・韓国入問題など、現代社会にもろもろの差別が存在していることを忘れてはならない。まるで、人が人を差別するところに、苦悩や憎悪の暗い海ができてしまっているかのよえに見える。

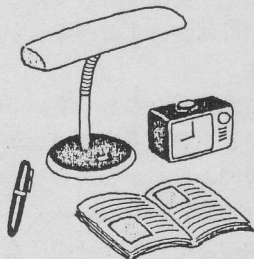
「本当のこと」を知る努力をしてほしい。「本当のこと」を知って、人の気持ちが理解できる人間に成長する人が多くなれば、世の中に本当の正義が生まれ、自由と平和を熱望する差別のない社会が少しでも早く実現されるであろうから。

「本当のこと」を知るために、図書館の人権問題資料コーナーをのぞいてみてほしい。設置されてまだ日が浅いため、質量ともにまだ不十分ではあるが、人権問題に関係した図書が並べられている。とっつきにくいかも知れないが、「本当のこと」を知るための努力を尊重し差別を許さない人間としての責務であろうと思うからです。

最後に、人権問題資料コーナーの設置に当り、図書館委員会及び図書係の御協力を得たことに感謝の意を表します。

（文責 幹事会）

## 〔読書についての箴言〕



読書は、  
他人に、ものを  
考えてもらうことである。  
本を読む我々は、  
他人の考えた過程を  
反復的に  
たどるにすぎない。

〔ショウペンハウエル〕





# 卒業生（昭59年）と図書室・読書

## 高専生活と読書

機械工学科 濱荻 健司

卒業を間近にひかえ、5年間の長い高専での学生生活を通じて、本校の図書館をどれくらい利用し、何冊ぐらいの本を借りたのだろうかと考えてみた。すると借りた本の数はおそらく50冊にも満たなかったのではないかと思う。つまり一年に10冊以下だったわけである。これほど恵まれた図書館が身近にあり自由に利用することができるのに我ながら情けないと思うとともに、なぜもっと有効に利用しなかったのかといまさらながら不思議に思う。また、少ないながらも借りた本はいかなる種類の本だったかと考えてみた。その内訳は90%以上が機械工学の専門書であった。つまり、これらは工学実験のレポートやその他の授業で最小限必要だった本を借りたというだけで、もしこれらの本を除いたとすると、図書館を5年間を通じてほとんど利用しなかったということになる。しかし、このようにレポートを書く時のみ必要な本を借りるといった利用法が、平均的な高専生の現状ではないだろうか。確かに、図書館に頻繁に出入りし、専門書から小説、雑誌に至るまで幅広く活用している人もいるかもしれないが、私の身近には、ほとんどいなかったように思う。それどころか、いつも他人のレポートを丸写しといった連中は最低限必要な専門書をも借りてなかったのかもしれない。これが今の正直な感想である。

しかし、このように図書館にほとんど寄りつかなかった私でも、全く何も読んでいなかったというわけではない。これでも、興味のある分野の本は乱読した。確かに純文学や哲学書などの堅い本はまったくといって良いほど何も読まなかった。しかし、エッセイや歴史小説のたぐいは、5年間で200冊以上は読んだのではないかと思う。愛読書として繰り返し読んだものはほとんどなかったが、おもしろいと思ったのは、エッセイでは、北杜夫や開高健の著書、歴史小説では司馬遼太郎の著書で、そのほとんどを読んだと思う。他人から

見れば軽いものばかり読んでいるように見えるが、もともと歴史には興味があったし、自分が良いと思うものを読むのが一番、また、何も読まないよりは幾分ましだと思い乱読した。しかし、堅い純文学とは区別され、どちらかと言えば娯楽小説と見なされる傾向が強いこれらの種類の小説の中にも、人に一度読んでみることをすすめる価値のある本も結構あった。特に心に残った作品をいくつか紹介してみると、エッセイの中では、北杜夫の「ドクトルマンボウ青春記」などがおもしろかった。幾分軽いものではあるが、著者が高校に入る時から始まり、父茂吉の死の知らせを受け、処女作の原稿を持ち列車に乗るところで終るが、物質的には不自由しながらも、精神的には満たされている著者の青春時代がうらやましく感じられる。また、歴史小説の中では司馬遼太郎の明治維新を扱ったもの「世に棲む日々」、「竜馬がゆく」、「坂の上の雲」などは、登場人物の主だった者は我々とそれほどかわらない20代の青年である。その彼らが志を抱き、命を顧みず目標に向い、志なかばにて倒れるというものであるが、平和な世の中で自分の存在価値さえつかめない私に、自分がいかに甘えた生き方をしているのかと嘆かせ、こんな怠惰な生活を送っていても良いのかと焦りを感じさせるものであった。20歳にもなって歴史小説を読んで熱くなっていると笑われる方もいるだろうし、娯楽小説など読んでいられないと言われる方もいるかもしれませんが、一度読んでみることをすすめます。少しぐらいは何か感ずるところがあるに違いないと思います。

また、理工系の学生である我々にとって、この種の本を読む必要は無いと思われる方もいるかもしれませんが、自分の専門の事しかわからないといった専門馬鹿では困りますし、かといって、テレビやラジオから一方的に、そして受身的に新しい情報を受けているだけでは知識を得るというよりも流行を追いかけるだけといった結果になりかねません。そこで、本を読むことが必要になってきます、自分の好きな分野の本を好きなだけ読むのです。つまらない本でもかまわない、良書を見つけるためにはつまらない本を読むことも必要か

もしれません。とにかく新しい知識を積極的に得ようとする態度が大切です。

本を自由に読める時間が有るのは学生の間だけです。もっと本を読むべきです。そこで図書館を利用することは経済的にも有効だと思いませんか。

## 卒業にあたって

電気工学科 佃 和吉

昭和六十年春、桜の蕾まだ見ぬうちに私たちはここ奈良工業高等専門学校を巣立つ。五十五年の入学時以来、我が高専桜は五度私たちの前に花を咲かせ新学年を祝してくれた。そして今、その高専桜は夢と希望に満ちあふれた新入生にその華麗な容姿を捧げるべく春の風を待っている。また一方、私たちが自ら選択したそれぞれの道には、不安ながらも強い開拓心を胸に抱いて進み行く私たちを迎え入れてくれようとしている桜がある。

私が十五の春にこの学校の門をくぐることを決心したのは、共通一次という嵐を避けたいがためであった。当時、私には高校の教育体制は大学受験のためだけにあるように思われた。大学に入ることを最終目標とし入学後は思う存分自由に遊んでみたいとしか考えていないような学生がほとんどの現代、そういった中で編差値を競い自分もその波にのまれ、流されて行きたくはなかったのだ。在校生諸君、そしてこれから五年間この奈良高専で学ぼうとしている新入生諸君の中にもこの意見に同調するものは少なくないことと思う。私たちは他の高校生たちとは違い、すでに十五才で自分の進むべき道を選んで来たのだという自信を胸に抱いて勉強やスポーツに励んでもらいたい。そして他人から学校名を尋ねられた時は、はっきりと「奈良高専！」と名乗ってもらいたい。

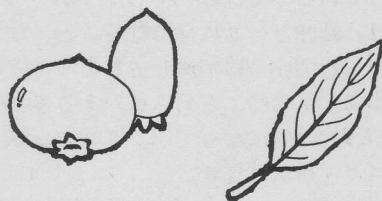
しかし、やるべきこともやらないで態度だけ大きくては困る。よく「学校の成績だけで一人の人間を判断できるはずがないし社会に出たら何の役にも立たない。」といて結局自分のやりたい事以外は何もしない者がいるが、そんな者にはこの言葉はただの『敗者の遠吠え』にすぎない。確かにこの言葉の言っている意味は正しい。しかしこの言葉は一生懸命努力して立派な成績（もちろん自分自身に対してであり他人と比べてではない）と業績を得てはじめて通じるものなのだ。与えられたことも出来ないでそれ以上のことが出来るは

ずがない。学校の成績は、与えられたことに対しに努力したかを示すバロメーターであり、人間を判断する要素の一部であることには違いないのだ。私の場合、負けず嫌いで中途半端が嫌いな性格が幸いし、自分では「奈良高専！」とどうどうと胸をはることができると思っている。

因に私の勉強法を紹介しておく、①ノートは人にたよらず自分でつける（時には怠けたこともあるが）。②試験五日前までにノートを中心とした復習を行い、わからない部分は図書館の本を大いに利用し、それでもわからない場合先生の研究室を訪れる。③ノートの内容がすべて理解できれば教科書、図書館の本を数冊用いてノートの内容を自分なりに新しくまとめ上げる。④試験期間中は昼から勉強をはじめ最終チェックを行い徹夜には決して持ち込まない。そして⑤何事も途中で投げ出さず最後まで努力する。①において、なるべくノートの項目ごとのつながりをきちんとその時にメモしておくことが大切である。後でノートを見たときボツンと記されている単語（中には文章のつながりがなくなただ重要語句だけしか黒板に書かない先生もいるので）がどのような意味をもつのかわからないことが多いため特にこの点には注意が必要である。以上であるが、これが少しでも諸君の勉強の役に立てば幸いである。しかし今に直らない私の欠点は『間際にならないとやらない』習慣である。これには身につまされる思いがする学生も多いはずである。試験の度にあらためようと思うのだが、とうとう卒業まであらためることができなかった。諸君もこれだけは早めに直してもらいたい。

最後に、この五年間適切な指導をいただいた諸先生方、編入学試験に際して常に親身になって下さった学生課の皆さん、そしてお世話になったその他職員の皆様に厚く御礼申し上げます。

昭和六十年三月



## 僕にとっての小説

化学工学科 新家 明

どうしようもなく悲しい時があります。

失恋の悲しみ、別離の悲哀、そして目標にどのようにしても到達し得ないことを知った時のどうしようもない絶望。

悲しみのうちには、或る程度までそれが来るであろうという予想が出来、それに対する心積りをする余裕のある時であれば、まるで昼寝をしているような安閑としているような時に、冷水を浴びせかけられたように唐突に来てしまうこともあります。

心の準備が、或る程度まで出来ていたとしてさえ、実際にその場面に直面した時には、大抵の人は気が動転してしまい、周章狼狽してしまいますし、ましてやそれが唐突にやってくる時ならば尚更のこと、普通、人の心は、動揺してしまうものです。

唐突にやってくるものが、例えば喜びや幸福ならば、例えそれに対応する術など知らなくても、唯、周りの暖い空気に従っているならば、良い方向へと導いてくれますし、更に何か能動的な行動をするならば、周りの空気が更に素晴らしい方向へと案内してくれるものです。

悲しみは、応々にして諦めを伴って解決したように見えるものですが、ジグムント・フロイトは次の様に述べています。

「断念の苦痛に耐える術さえ身につけることが出来るならば、案外人生は楽しく送ることが出来るものです。」又、それとパラレルな意味で「成年への過程は、諦念の蓄積そのものである。」と。

実際、諸兄諸姉方、最初に記憶に残っている頃から思い返して下さい。多分そこには、目標として掲げ、達せられたこともあるでしょうが、内には時間という水によって洗い流し、諦めというしみとなって残った布切れの一つや二つ心の底に引かかっているのではないのでしょうか。

しみは、時間とともに薄くなることになったとしても決して完全に消滅してしまうことはありませんから、ある時ふと自らをかえりみた時、そのしみがひどく気になってペシメスティックな気分になることがあります。

かといって、僕は、フロイトの言葉を受け容れる気は毛頭ありません。僕達の年代に於いては、

賛成することも同意を示すことさえ拒否せねばならない言辞であると信じています。

現実のみを見て、理想を破棄してしまう愚かな行為は、人生に疲れてしまった人達だけでよいのです。

僕達は、夢も希望も持つべきなのです。

しかし、心の底に引かかったしみが、それ等を引張ってしまうのも又事実でありましょう。

永遠に少年の魂を持つ人と形容される人に小説家が多く、それ故に生活破綻者が多いことに気が付かれたことがありますか？

僕は、成績が極端に悪く、諸先生方の御厚意に甘えて卒業させて戴いた身であり乍ら偉そうに僕よりもずっと聡明な諸兄諸姉に意見する非礼を御寛恕願ひ、上の答えを僕なりに考えてみました。

昔から「百聞は一見にしかず」という諺の教える通り、経験はどんな知識よりも強いものだと言われてはいますが、経験は多くの悲哀と歓喜を合わせ持つものです。

僕の友人にTという男がいて、彼はMという女の子が好きで好きでたまらないと常々話しておりましたが、容姿、学力とも遙かに劣る上に彼女は小学校の頃から作曲が出来る程ピアノが上手いのに彼は、音楽はおろかかなるスポーツもその鈍さ故に出来ないという有様でした。

実際、彼が月日を経て、どうしようもなく苦しい結論を自覚した時はどんなに落胆したものかは他の如何なる人も想像出来ないのだと自分で言っていました。

人は、自分の経験からでしか物事を判断出来ないものであると僕は思っています。

ですからT君が、自らの死ぬ程の苦痛を誰とも共有出来ぬが故に、自らの苦しみが世界中で己れ一人のものであるというのは当然だろうと思うのです。しかし、そんな片恋いの苦しみ等は、世界中の人口の殆んどが一度は経験しているものだろうと僕は信じます。

現今、多くの小説が、恋愛を描き、多くの人々が洋の東西を問わずに感動したのは一体何故なのか、T君は全く知らなかったのでしょうか。

小説を擬似体験の一つであると位置づける人がいます。

余りに短絡的な考えですが、実際の経験ならば余りに苦しすぎて心のまとまりがなくても、擬似体験ならば十分に距離をおいて比較的冷静に考えることが出来るのではないのでしょうか。



だからこそ、自らと同じ様な同志を持つと同時に、自らを見つめ直すという芸当が出来るのではないのでしょうか。

小説という、芸術の一つのメディアが、恋愛をしばしば扱うのは、これによって苦しむ人が余りに多いからではないのでしょうか。

苦しみを除去することは本人でしかなすことは不可能であるとしても、小説はそれを助ける触媒には充分になり得ると思われまます。

有島武郎は、著書の中で「芸術家のみが創造を司り、他はこれに与らないものだとするなら、どうして芸術品が一般の人に訴えることが出来よう。芸術家と然らざる人との間に愛の断層があるならば、芸術家の表現的努力は畢竟無益ではないか。」と述べています。

人間が人間である限り目標は常にその力の原動力となるべきものですが、時には目標となるものの崩壊、或いは前に述べた目標への到達不可能を意識した時の悲しみがあります。

アルベール・カミュというフランスの作家がいます。

彼の作品のノーベル賞受賞作で「異邦人」という名の小説があります。

僕が、あることを機会に何もかも嫌になってし

まった時期があり、毎日が嫌で嫌でたまらず、頭の中はベシミスティックな考えしか浮んで来なかった事がありました。

私事で恐縮ですが、私は、生まれて最高の感激を上の本から受けたのです。

全く全てが、その時の自分を合致していたのです。恥しくなる位全てが合致したのです。

学校に来ても周りの奴等を軽蔑し切っていたその時には、自分と同じ状態の人はどこにもいないと信じていたのです。

僕のような劣悪な人間を基準には出来ないでしょうが、人間は矢張自らの経験以上の判断力は、ないものであると信じます。

一人の人間には一人の人生しかありませんが、一冊の本には、一人の人生があり、千冊の本には千人の人生があると言えます。

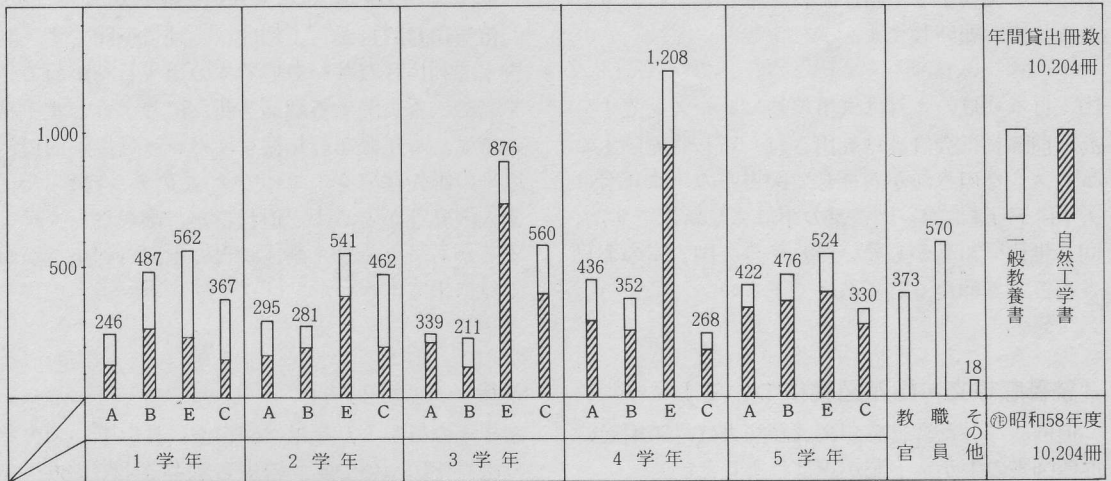
必ずしも人間の偉大さがそこにあるとは言えませんが、少なくとも暇つぶしに人生相談にのってもらいで一人の人間を覗くのは悪いことではないものと思えます。

太宰治は言っています。「小説は所詮、女、子供の寝物語に過ぎない。」と。

ですが、女、子供の寝物語だって人、一人の人生を変えるには充分なのです。

## 昭和60年度 図書室利用統計

〔クラス別貸出冊数〕



〔分類別蔵書構成〕 昭和60年5月現在

総記	哲	歴史科学	社会科学	自然科学	工	学	芸術	語学	文学	文庫	新書	
1,987	1,990	4,088	2,376	11,452	14,638		2,374	3,221	8,338		4,069	
							産業					
							165					

## 課題図書リスト

### 〔お知らせ〕

#### 〔1985年度 図書委員の紹介〕

学 科	図書部会	視聴覚部会	紀要部会
一 般	◎田 中	田 中	溝 端
機 械	宮 本	○宮 本	○関 口
電 気	宮 田	宮 本兼 京	京 兼
化 工	河 越	大 植	河 越

◎ 委員長    ○ 部長

- |               |             |      |
|---------------|-------------|------|
| △高橋三千綱        | 九 月 の 空     | 角川文庫 |
| △開高 健         | 裸 の 王 様     | 角川文庫 |
| △三島由紀夫        | 潮 騷         | 新潮文庫 |
| △住井 すす        | 橋 の ない 川    | 新潮文庫 |
| △Herman Hesse | シツダールタ      | 新潮文庫 |
| △井上 靖         | 天 平 の 壺     | 新潮文庫 |
| △遠藤 周作        | 沈 黙         | 新潮文庫 |
| △夏目 漱石        | そ れ か ら     | 角川文庫 |
| △読売新聞         | 終 戦 前 後     | 角川文庫 |
| △北 杜夫         | どくとるマンボウ青春記 | 中央文庫 |
| △植草圭之助        | わが青春の黒沢明    | 文春文庫 |
| △B. Brecht    | ガリレイの生涯     | 岩波文庫 |
| △中村 梧郎        | 母は枯葉剤を浴びた   | 新潮文庫 |
| △神山 恵三        | 森の不思議       | 岩波文庫 |

#### 〔新人紹介〕

**桑原隆佳** 20才です。この4月から図書館で働き始めて、早いものでもうじき半年を迎えようとしています。

読書と無縁だった私が図書館で働くことにより「読書」のすばらしさを知りました。

読書というのは簡単なようで非常にむずかしいものだと思いますが、皆さんがんばって読書して下さい。図書室と一緒に読書を楽しみましょう。よろしく願います。

㈱ 日本列島の4月は人事移動のシーズンです。高貝前係長は会計課へ転出され、新しく元陸上のエース 桑原さんが着任して図書室の平均年齢は大巾に下りました。図書室の事はまだ新米ですが、同じ世代でお話し易いでしょう。図書室のお兄さんとして仲良くしてあげて下さい。

#### 〔読書感想文・課題図書について〕

恒例になった読書感想文課題図書は、50編近い推薦図書の中から下記が選ばれました。

会心の感想文が書けましたか。毎年入賞した力作の中から1～2編が、学外コンクールに入賞し、賞品として寄贈された文庫本が日々利用されています。

今年も頑張って入賞する程の力作を期待します。

#### 〔新入生と図書室〕

図書室と新入生を結びつける新しい試みとして、6月から7月にかけて、各クラス、午後の1時間自由に好きな本を選んで読んで貰いました。その時のアンケートはスペースの都合で次号に廻します。

#### 〔読書週間の催し〕PR

毎年10月27日から1週間は、読書週間です。図書室で利用されないでいる本の虫干しをかねて光を当て、本に関する認識を新たにしようとする試みです。今年は76周年振りにハレー彗星が1910年以來の雄大な姿を現す年です。この大きなテーマに素人の私達がどこまで迫れるか、高専祭とクロスするかも分かりませんが、読書の秋、利用をかねて見に来て下さい。

#### 〔後 記〕

今年の暑かった夏は、図書委員長以下、図書室の電算化についてホンの少し勉強をし、'86年から稼働させようと緊張しています。

一方、窮屈な図書室を少しでも広げようと改修工事も控えています。少しでも使い易く、入り易い図書室にしたい、とナイ知恵を使ってガンバッテいます。図書館だよりが遅れたお詫びまで。